

新編水滸畫傳

四編

八



門 875
卷 38

新編水滸画傳

新編水滸画傳卷之三拾八

東武 高井蘭山翁 評編

張順黄文炳と活捉

宋江が計圖ふ當り、黄文炳が一家斬盡に放し、火の熾ふ所方以延ぶ。百姓駢集り、火を救えんとする時、石勇杜遷大に呼て、汝百姓ら無益に死す。来るとある。我輩梁山泊の豪傑、數千人來て、黄文炳一家を殺し、宋江戴宗が為に仇を報ふまで、汝ら良民が干るといふ。早く去て禍いと避よ、必む出く、竟と招くべし。百姓等是と聞半信、半に疑ひ、只顧猶とく、處處に黑旋风李逵、双手に斧と輪、狂ひ來り。百姓ども、あまきを見て、大に膽を消し、先と争ひ逃散る。又副陣の方より、若干の軍士來て、火を救んとく、處處に花荣が箭に一人射殺と

新編水滸画傳卷之三十八

是諸人齊心驚。急に回して四面八方へ退きまゝ己やと薛永
黄文炳が家に火を放て焼立まゝの黒煙空に走地ふ匝紅燄天に飛て片
時の間ふ前後左右都て灰燼と成ぬ此時石勇杜遷李逵三人は遂に城
門を開きまゝ諸軍勢半は城門より走り出半は城上より跳出まゝ張
横三阮両童ら六人の城中に火の起しと見まゝ。忙しく岸ふ上り共に諸人
と接へく船に乘らりしや。宋江晁蓋あらびに諸頭領只黄文炳ふ遇
ざりしと恨ま各牙と噛直に穆弘が館へと舟と急ぎ潜去まゝ。此夜
江州城ふ無為軍に火の起りしと見まゝ。諸人騒動し遂に蔡九知府ふ斯と
告一處に彼黄文炳は此時知府と共ふ支と議して在りまゝ。無為軍に
祝融災ありと聞ま。大に驚き知府にやて。某急に回りて火を救まんと
と願くは一艘の官舟と以ま。某と送らりしや。知府あまこと閉て理りま

と船とや付て送まれま。黄文炳急に取乗頓て江面ふ出無為軍と
望ま見ま。火勢盛あま。紅焰天に沖ま。黄文炳あはて驚ま。つ
ふ遙くは一艘の小舟漕來り漸ま。黄文炳が船に近づま。水手罵
て云汝が其船何を官舟と避ま。彼小舟の上は壹人の大漢子進
ま出ま。云某らふ出火の次第と江州城へ住進する舟あり。早ま怒り
と息ま。黄文炳是と聞忙ま。船と出て問ま。出火は何ま。の城門
ふ當ま。や彼大漢子答ま。云城の北門ふ當ま。黄文炳が家の梁山泊
の頭領らに焼拂ま。一家の男女悉く斬殺ま。金銀財宝都て奪ひ去
ま。こゝろ笑止のこゝろ。黄文炳未だ閉め了らま。這はつふ我家と焼れ
ま。悔ま。彼漢子あま。と閃忽ち釣索と投て。黄文炳が船と
搭住ま。則ち身と躍せ。官船に跳乗し。呟ふ。黄文炳は本奸智多ま。この

あまふともや禍あること知て忙しく水中に跳入るる水底より又一人の漢子現き出黄文炳と抱き上て船の舟へ投入るる舟の上の男双手と挙てあまを楸へ頓く高手小手に絆めり今水底より現き出て黄文炳と抱上るる漢子の便ち是浪裡白跳張順あり又舟の上より釣索を投て官船と格住るる漢子の則是混江龍李俊之此時官船の水主も大ふ怕き多く柁に跪て一命を免しと伝しるる李俊が云恐おまら今殺とすれ間早く江州へ回り梁山泊の豪傑らが武勇を祭九知府に告し我輩近々江州へ攻寄て知府が首と刎んと日あり百万の勢と以て鉄城の籠とも我輩が眼よりこれば兎と獵より易し頭と洗く待と云閃よ水主ら命ちと免され際あく悦び後とも見ずして漕去るる李俊張順の黄文炳と活捉く心中大いに喜び遂に舟と回して穆弘

が館へと急しるる片時の間に岸辺に至り一處に諸豪傑あまを迎へ同じく穆弘が家の草堂の舟に入る衆皆左右に列り坐せしるる晁蓋宋江頭て黄文炳と引出さむる柁の樹に綁着あまを看とあし一盃酌べしとて上へ晁蓋下へ白勝ふ至るまで總く三十人の豪傑一盃と奉て飲酒と催しるる宋江先黄文炳と見く大に罵て云汝奸賊我と汝との住日寛もやう近日仇もあし然るに何れも再三再四知府と諫め我と害せんとの図りしぞ我又酒與ふ反詩を吟しりとして何ぞ汝が関ることあらんや汝も己に聖賢の書と讀つらん人と殺さんともれれば人又汝を殺さんと書と見ざるものと天道自然の理に辨へあし汝つある恨あつて我と戴宗と殺さんとすや汝が兄黄文炳の汝との同胞の兄弟あまも専ら能危きと助け負きと救ひ

善と好んぐ悪とあつむる人皆黄老佛と称すと聞よつて昨夜
黄文炳が家の毛頭犯ととあつて汝の専ら己に勝る者と妬み己
に劣る者と弄し唯よく悪と好んぐ善と悪むる人汝と黄蜂刺と
呼ぶあらずや我今日汝を殺し万人の爲に一害と除べきを尤又近日蔡
九が首も刎んとす汝速に分説ありや黄文炳告て云某今ふ至て其非を
知るる早く首と刎る人晁蓋大いふ怒る我汝が首と刎ざらんや汝早く
今日の非と知らば災と免せん一向人と害せんとして天罰早くも至る
ものありと牙と咬で罵りたり宋江諸人に向て云るる諸賢弟の内は
誰や早く手と下し此賊を殺しえ黒旋風李逵進み出て我肯て
長兄の爲に此賊と殺さん晁蓋が云汝是と殺さば弥可あらん速に手と
下し我が賢弟宋押司の寛と雪ぐべし此時李逵右の手は刀と揮ひ尤

の手あてハ黄文炳と指ざし罵て云るる汝奸賊蔡九知府が後堂
に在て再三知府と撮掇勸我が長兄と害せんを圖りたりが今日却
て汝が殺さるるハ則天のあつて所ありとて竟に頭を刎るる諸
の頭領都て宋江に對して喜びを賀しふたり宋江又諸人に對し
て云るる某不才とつとつ共幸ひに天下の豪傑と交りて結ぶ向
あり己に晁天王あつびに諸頭領の爲に再三山陣ふ田らましむも
父の命に背んことと忍びずして遂に配所ふ趣きりる處に想をす酒興
ふ乗して乱言と壁の上ふ書禍ひ戴宗に及んぐ兩人己に害せられん
とせし處に料らば又諸頭領ふ助けらまし仇人黄文炳と殺し心腹の
寛と雪ぬ然れども今日かのでき大罪と犯しぬる上ハ必定朝廷より
奏聞して某らと捉へんと図るべし某今晁天王等十七人の頭領ふ

宗江命李達
令斬黃文炳



新編大將傳卷之七

五



新編大將傳卷之七

從て梁山泊上るべき間、此外の賢弟らも某と俱に山陣に入んと想ふ
人の宜し用意と調へて來りて、若又某に従ふべきと思ふ人あり
べ其所存と語りて、只恐らくは若梁山泊に來りて、後必と官司
に捉られ禍と蒙りて、あつとあつと人願くは明らかふと察し、
李逵あまを聞て躍出づ云々、我輩悉く長兄に従て山陣に上
るべし、若一人あても從へざる人あり、我此斧を以て頭を砍劈べし、宗
江李逵と責て云、汝何ぞ不禮の言といふや、諸賢弟全く心傾け
帰服する時へ方に同往すべし、若然らざるといふんぞ強て誘引せん
や、此時諸人議論して云々、今己に多くの官軍と殺し、兩所の州郡
と開ぐし、められぬ賊官等必と朝廷に奏聞して、我輩と捉んとすべし、
某ら今若長兄に従へずんば、何もの所に馳り、身と藏るや、只宜しく長

兄と共に梁山泊上るべし、宋江是と閉く大に悦び、此日朱貴、宋万
兩人と山陣に廻らち、吳学究等に斯と告ぐ、翌日諸頭領と手
分し五行小備へて進発し、第一行へ晁蓋、宋江、花榮、戴宗、李逵、第二行
へ劉唐、杜遷、石勇、薛永、侯健らあり、第三行へ李俊、李立、呂方、郭盛、
童威、童猛等あり、第四行へ黃信、張橫、張順、阮小二、阮小五、阮小七等、
第五行へ燕順、王英、穆弘、穆春、鄭天壽、白勝等あり、總て二十八人の豪
傑、一千餘人と引て、次第と序で首尾と連ね、最嚴に備へて、穆弘ハ
數乗の車に、父穆太公并に眷族、其外家財等と戴則ち一把の火と放
つ、家と焼拂ひ、五行の人馬己に打立、其間僅二十里と隔て押行る
己に道と經ると、三日及び、黃門山と云處に至り、宋江則ち晁蓋に
對して云々、此山の形勢、究て惟惡あり、恐らくは大勢の人馬、山陣

と設けく在るやあらんづまば宜く後軍の至るを待て一同過
るべしと云も終らざる山上に金鼓の聲大ひ響く見蓋宋江等
駭き各軍器と持て近く向ひくる處に山坂の辺より三五百餘小
賊閃き出當先四人の頭領各軍器と揮て呼らる云らる汝ら大
ひ江州と聞し無為軍と襲ひ若干の官軍百姓等と殺して今梁山
泊を面らんと欲するや我輩四人此所出て汝らと待て久し只宋江一
人と苗て我輩に与へば其餘の者どもは都く一命と饒すべし宋江是
と閃く馬より跳下り則ち地上に拜伏して云らる某則ち宋江と云
者あり向に悪人等がゆるに害せざるんとせし處に諸の豪傑に救
まて一命と脱せり某曾て足下らと犯しつることあり只望むらくは
仁慈と垂まひて某并に諸人の命と饒し又若然らば身と終るまじ

此恩と忘るまじ四人の頭領是と閃慌て忙を馬を滾び下り再三再四宋江
と再拜して懇懇と云らる某四人久しく長兄の大名と聞及び且尊渴想の思
ふ逼りし共縁熟せずと未だ尊顔と拜せり前日江州ふ於て入牢
しむひぬと閃し又急に人數と馳宰と劫人と圖りし共未だ虚實と分明
知らば先一人の山兵と江州に馳て動静と伺せり梁山泊より餘多の豪傑
來つ押司と奪取刺へ無為軍と犯し黄文炳一家と焼打せりと告ぐるも
某四人大不悦び則此所出迎へ尊顔と拜せんとする果して今日長兄汝觀
奉ると莫太の幸ひ願ふ長兄諸の豪傑とて某らが山陣に駕と枉ら聊
村酒を具へ一盃と献ず宋江大不感悦則四人の頭領と扶起し對面し其
姓名と問ひくる一人の姓は歐名は鵬原黃州の人なり綽名と摩雲金朝と
号は又一人姓は蔣名は敬本湖南潭州の人ふて綽名と神蓍子と号は又一

人の姓ハ馬名ハ麟りんとあまえん元南京建康の人なり。綽名と鐵笛仙と号し。又一人姓ハ陶名ハ宋旺そんとう旧光州の人なり。綽名と九尾龜と号し。此四人の頭領宋江と迎へて談話しまご体らざるに小賊らともや酒と携へ来て先晁蓋宋江不献じ。次ハ花榮戴宗李逵に献じ。衆人都て相見へ快く酒と酌ぐ。一時たゞり過るる處に第二行の頭領己に至り同じく相見へ盃己の數遍巡りしるべし。四人の頭領先二行の頭領十人と請て黃門山の陣中に至り。則ち聚義廳不於て美々しく酒宴と設て款待する。又一時餘り過るる處に第三行の頭領も同じく此處に至り。共宴上り列りくる。宋江先四人の豪傑を對して云々る。我今義兄晁天王と頼んぞ。梁山泊に上るといふ大義と結んで死生と同じくせん。欲をもたらず足下等四人も此所と乘て同じく梁山泊の大陣に入り。盟と誓ひる。又

や四人の頭領大ひふ悦んぞ。云々る。若兩人の長兄某らと乘るるべし。共の大陣に伺候して犬馬の勞を施すべし。晁蓋宋江喜悅斜めり。いと云。賢弟ら己の我輩を助け。梁山泊不來らんとあへ。早々此所を收拾て發足あるべし。其日全く事と調へしむる處に四行五行の頭領并惣人數皆到着せしる。一同に此山陣に一宿し。翌日晁蓋宋江再び備へと列ね進發す。彼四人の頭領ハ手下の小賊五百餘人と領し。第六行に備へて進發す。宋江ハ又四人の豪傑と得て心中大ひふ悦び。則ち總と並へ語り。其異郷に流落し。數度恐懼と受し。いづも。許多の豪傑と義と結び。今日長兄に従つ。山陣に趣く。あこ。萬千の幸ひあり。向後いづれ某と長兄とも必むと死生と同じくせん。と談話し。互に與と催し路を行くる程。み覺へむとや。朱貴が店に至

此時山陳と守りて苗主居し。四人の頭領、吳用、公孫勝、林冲、秦明等へ、新泰の頭領蕭讓、金大堅と俱ふ。朱貴、宋万が注進を閉じ、日先達て朱貴が店に至り、専ら待らば。處へ晁蓋、宋江并に諸頭領、衆皆恙なく至ると見て、大に悦び、忙しくあまきと迎へ、直に金沙灘に至り、金と鳴し、鼓を擗つ。共に山陳お上り、則ち聚義廳に於て酒宴と設け、香花と備へ、宜しく帰山の賀と表し。宋江大に辭して、主と再三、宋江お譲りて、第一位の座に請われ、宋江大に辭して、長兄何ゆゑか、と云ふ。此度某己に殺されんとせしと、諸頭領お救され、此恩報し。と某深く憂ひとす。いんぞよく第一位の座と犯して、山陣の主し。長兄ゆゑ、再三おまこと譲り、某自ら死とあずべし。晁蓋が云、當初某ら七人の賢弟の救ひと蒙らずんば、

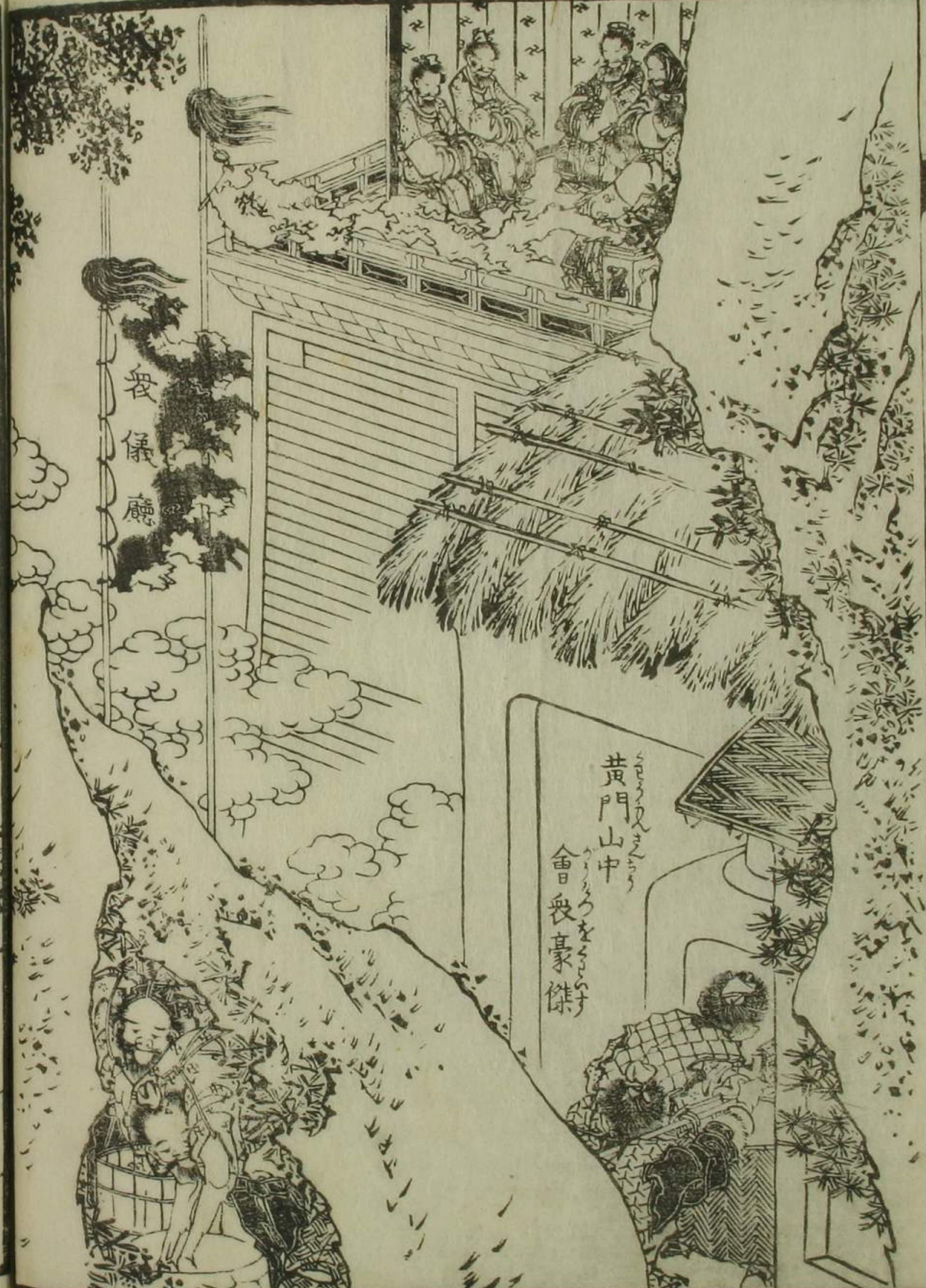
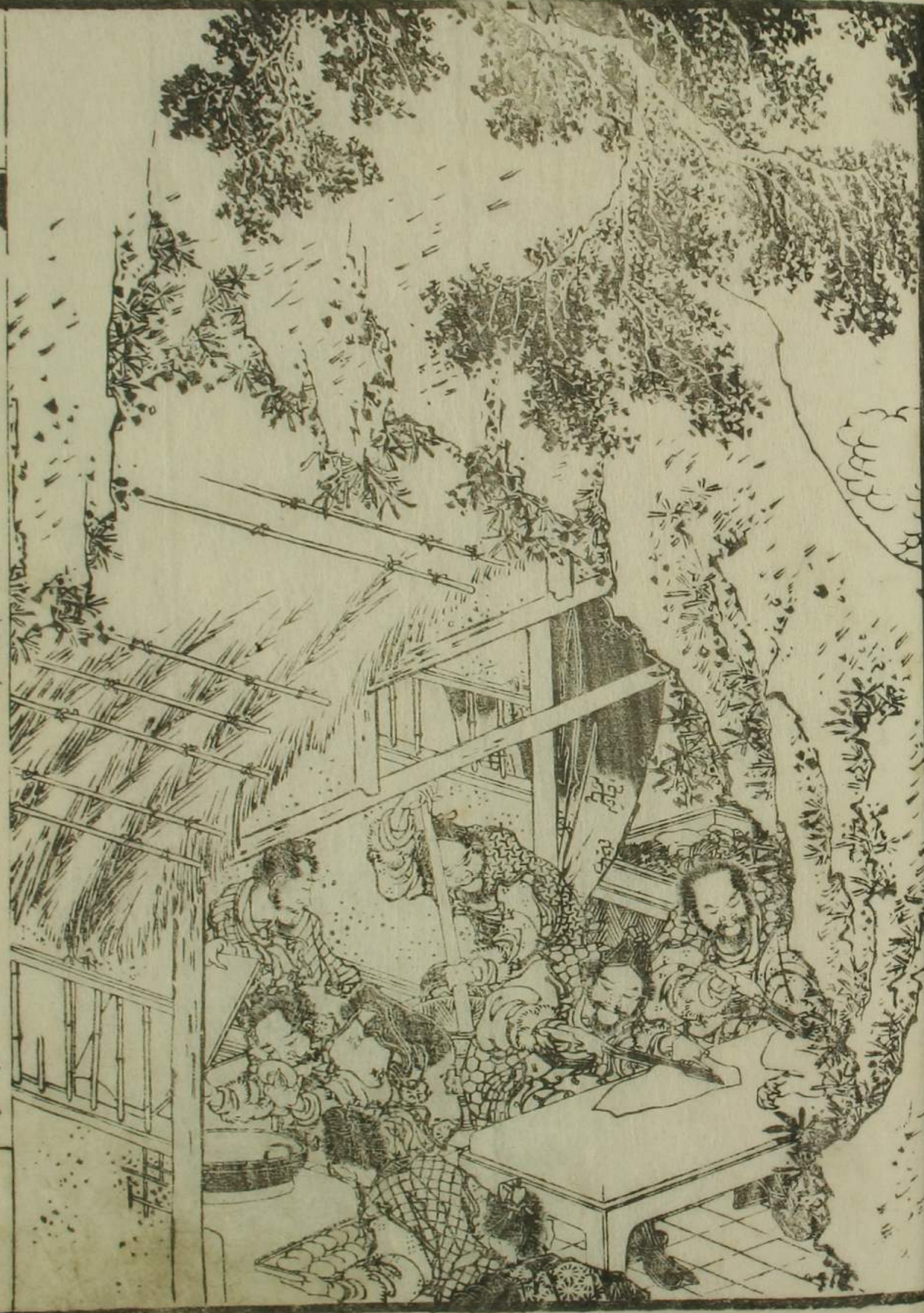
いんぞよく。今日の福ありんや。賢弟の原來山陣の爲は、恩主あり、若賢弟第一位の座に即まらずんば、誰うあへ、此座と犯さんや。必とあまこと辭して、我が心と煩も、ゆるふか。宋江が云、長兄の齡も己に某に二十歳の長あり、某の一座お就を自らあまこと羞殺すべし。と頻りに辭し、遂に晁蓋と第一位お坐せし。宋江第二位、吳用第三位、公孫勝第四位お坐し。宋江又諸人お對して云、今日へ先回頭領の左の上位お坐し。又新頭領の右の客位に坐し。又後日其功の輕重と論じて、方より坐位と定むべし。諸頭領もまこと閉じ、然りと同じ。乃ち左の方の一連、右林冲、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、杜遷、宋万、朱貴、白勝等坐し。右の方の一連、花榮、秦明、黃信、戴宗、李逵、李俊、穆弘、張橫、張順、石郭盛、蕭讓、王英、薛永、金大堅、穆春、李立、歐鵬、蔣敬、童威、童猛、馬麟、石

勇侯健陶宗旺等坐之。以之。總て四十人の豪傑、左右に坐と列ね。大
小樂と奏し、飲酌と催しぬ。宋江又諸頭領、小對して語り、
府京の童子等が歌ふ謠言と以て、黄文炳に告知せ、
其謠言の意と解く。則ち宋江の二字に應ぜしめ、某と謀反人
も、原知府あると知らざりし、又かの黄文炳圖書の上、
諱の字あると見て、則ち某と假する返簡と知り、再三知府と撰
投て、先某と戴院長とと殺し、
にあらずんば、
長兄へ天上の言語に應じ、
聚りて、謀叛と企むも、何の不可あり、
乃ち晁蓋兄へ大

皇帝とあり、
公孫道士の国師とあり、
棄て、彼所に移り、
大いふ娛し、
言とつや、
我頭と列、
置べし、
と催し、
晁蓋心中に今日の會と悦ぶ、
限りあり、
則ち金銀と分

て小賊どもの恩賞と行ひ猶且山前山後ふ若干の房屋と作りて諸頭領の眷属らと住せしめ此より山陣に光と増て大いふして威威遠近に振ひ多く一日宋江諸頭領に對して云々我幸ひに命と脱き山陣に上り毎日諸兄弟と共に飲宴とあり甚と樂しといふも只恨らくは祖父某が禍と蒙るとありん某既に大罪と犯しつるをさば必定朝廷より鄆城縣に文書下りて某一家と捕ふべし恐らくは祖父が命も且夕と保つてうんと思へば我常のこれと念て寸志と安んずる違あはば是ふ因る先暫く山陣と離れ去りて故郷に回し急に老父と棄ひ取て共に山陣に上るべしと云ふ諸兄弟あまを許しつるべきや晁蓋が云賢弟の欲しむ所則ち人論の大事やと生と養ひ成と送る人の子め道あまを今尊父と迎へ山陣に來りし人となふ不可

あり然れども只恨らくは諸兄弟連日辛苦して陣中の人馬いまだ定らず猶三日と延引しつる人馬と起して俱に鄆城縣に発向し終に尊父と棄ひ取て賢弟の所望と准ふし宋江が云數日延引せんは易かれども只恐らくは朝廷より文書下つてや祖父と擒とせむくまば日と延て遅々せんとなふ殊に人馬と引て発向せば却て更と誤るべし只某一人暗に馳往家弟宗清とももに祖父と棄ひ取て早速山陣に回らん然らば是と知る人無ふして事弥穩かるべし晁蓋が云賢弟の高見其理あるに似れども若万一途中に誤あはば誰う肯て賢弟を救ふ人あらんや尚自ら三思と加ふれと察しつる人宋江が祖父の為ふ死あはば何の怨あらん只顧遲疑せんやとして即日發足の用意と調へし處に晁蓋等色々苗をとも宋江更



我儀廳

黄門山中
會我豪傑

に苗らば頓て諸頭領に別山と下りて晁蓋以下の豪傑ども悉く金沙灘まで送りて遂に袂と分ちり

○還道村より三巻の天書を受

初も宋江へ鄆城縣と望で進發し。不日に宋家村の近邊に至り其夜の先客屋を求め一宿し。翌日未明に宋家村の十里前ある林の内へ入り。其日の晩を待漸々紅日西山に落ちて。初更の時も近づき。宋江暗に林の内へ出て。逕ちに宋太公が家の後門に至りて。あつとと敲き。宋清己に門を開て走り出即ち宋江を目見。大に驚き長兄へ何ゆゑ家に回りまふや。宋江が云我此度來り。老父と汝とと迎へ取んが為あり。宋清が云長兄向に江州城まで犯す。ひし罪の次第。そや此所の人都在り。と知りぬ。頃日知縣相公常

に兩人の都頭と我家に遣し。緊く前後の門と守ら。只文書の到來するを待て我輩父子と捉ん。のこし。是に依り我ら父子す歩も家を出る。能く近日父子同く入牢せん。と必定あり。長兄再び梁山泊に回り。速に諸頭領と共に発向在て。老父并に某が一命と救ひ。人必を疑惑遲滞して自ら誤ち。まふとあり。宋江の事を聞て。大に驚ろ。此より直に身と回して。再び道中の馳出。唯足の信せ。梁山泊へと走り行。此夜月色朦朧。路分明。あざれば。宋江益心と忙し。一向急に走りて。一時許馳る處に。忽ち背後に數十人の声在り。大に呼ぶ。宋江頭と回して。まふを見。一簇大把と揮照して。諸人奔。高く声呼。云。宋江走ることあり。早く手と束て。綁に就。宋江是と見て。心中に悔て。想ひ。我。不幸。とて。晁天王の諫言と容

宋江、馬麻、音身、再存、遇、孝、孝、孝

果して今宵禍あり。願くは皇天憐と垂て。宋江が二命と救ひよると心中に
是と禱り頻りに足と飛せ走り行處に。漸々風薄雲と拂ひ。一輪の明
月理ま出さる。宋江月の光に乗じ此所とさる。都て峨々たる高山
あり。山の下方澗連り水深く。其中に只一筋の道あり。此所ハ還道村
と云所あり。宋江直ちに村中に馳入る。身と躲る所と尋ね求る。林
の内に古廟あり。宋江急に廟門と推開ひ。進み入前殿後
殿徧く繞り。隠れ所と求め。更にも身と安んずべき所もあらず。弥
心と驚ろし。ちるる處に外面に人在て。多くハ此廟内に躲し。あつんと
搜せし呼らる。是鄆城縣の新都頭趙能趙得が声あり。宋
江大に膽と消し。廟神の前掛る帳幔の内に入る。躲さる。此時兄弟
の都頭趙能趙得自ら四五十人と引て。廟中に進み入。火把餘多揮照させ

て。此彼搜し。宋江心中に神と禱こい。望らくハ神明某が一命
と救ひよると合掌し。諸人都て廟神の前と過る。帳幔の内に見
る者一人もあらず。宋江あきと悦び。暗息と吻と續くる處に。
彼趙得自ら大把と揮て。帳幔の内に照し。忽ち火把の火飛て。
趙得の眼の上の落さる。趙得大に驚ひ。覺る。火把と地上に棄て。再
び帳幔に走り出。即ち衆人ふ對して云。彼らつて廟中にあらず。又
逃出一人路あり。知らば何もの所へ行くと。衆皆奇異の思ひとあ
り。此時一人の土兵云。彼必定還道村の林の内に入る。躲る。あらん
此還道村と云。只一の道在り。出入を村中。独高山林木多き。ゆつて
更に別路あり。彼れ果して林の中に入。隠れ。恰も籠の内の鳥ふ
して。終に手と束て捉らる。兩都頭宜しく村口と守り。早曉あ。早

早林の内と搜して活捉べし彼もさしよく起と擗て天に飛も脱
 と叶ふまゝ趙能趙得是と明て然うと同日則土兵等と引と再び廟
 外に馳出々々宋江暗のまきと見て心中に悦び尚神明と祈て身とも
 動さず躲を居る處に一人の土兵廟門の前に在て呼々う々々
 西都頭再び廟内に入々彼必此内在べし趙能趙得是と聞又
 衆人と共に廟前に到て問々々汝何と以て彼此内に在んと云や彼土
 兵云西都頭廟門の上と見々々二の手の跡明々々して塵の上
 あへ彼今廟門と推開て内に入々々の疑ひあり趙能が云汝が言
 明あり再び衆人と引て廟中に入四面八方一々仔細に搜々々れば
 宋江の只命運の拙きことを嘆々々土兵ども都々火把とて
 前後左右搜々々云云あり趙能が云此上へ再び帳幔め

内に頭と入則ち火把を照し繞々の闖き見人とせし處に忽ち一陣
 の怪風起て若干の火把同時に吹滅々々れば暗々と黒々々して面と
 對すれども見へざらん趙能が云怪哉廟中の風起るらん我是
 と察するに我輩再三廟中と開しむるも多神明の悪々々あらん
 是に依々今此帷風起るらん我輩先廟外に出々只嚴に村口と守り
 夜明あを再び來つて搜すべしとて遂に人數と村口に引取々々宋
 江の帳幔の内在る暗に想ひ々々我今神明の佑と被て縲縛の
 辱めを免とて々々彼輩猶村口と守てあつるればのらんぞ
 よく此村と逃出入々として只顧心と患々々覺へば眼と合せ々眠
 り々る處に夢中又殿の後より人來り々々宋江大に驚てあまを
 々々二人の青衣童子逕に帳幔の前に至る宋江に對して云々

我今娘々の命と奉て星主と迎へんが為此所に来まらん。星主早々
 我に従つて尊歩と移し又宋江是と聞しども只頭と低て一言
 も答ざらうらん又彼童子兩人がいつく娘々今星主を迎へて談話し
 ままんとあり宜しく速に來り又宋江彼兩童子が言ハ鶯の聲燕の語
 して男子の音声にあらざらうらん。客頭と擡て熟々たるに果して兩
 人の女童あり宋江大に恠しんで問うらん。兩人の女童ハ實に何まらん來
 りまらんや女童が云娘々の命と奉て星主と宮中の迎へ宋江が云仙童
 此に至らうらんハ必定人差ひあらん某ハ姓ハ宋名ハ江と号す星主と云
 人云人の某が下にあらば女童曰我のぞ人と差へんや星主今宮中に至て
 娘々に見えらひあらば其來歴自ら知りまらん。早く我以隨て來らう
 とて再三再四宋江と引ら後殿の傍に至り兩人の女童又一の牆門有と

指がして云くらん。宋星主此牆門より入る人として則ち宋江を導き
 門内に入らうらん。宋江私に此所に至り頗る恐入く見らる星月明朗
 とて香風馥郁とらん。宋江想道此廟の後にかくのどき風景よ此
 所ありまらんよあら。又一里許過り此辺とらん。左右ハ皆大なる松
 樹枝と交へて稠密。其中央六つの大路あり。前面六瀝々と澗泉
 響て青石の橋あり。兩辺ハ都て朱欄杆あり。岸の上ハ奇花異草
 華々として佳色と一輪の月映じて。廉しく清香と一陣の風ハ寄す
 ちらも茂なる竹柳の翠まで自ら凡らう守。偏に人間の住所と見
 へざらうらん。宋江益躊躇して思ひまらん。我近く鄆城縣に在らうらん
 曾てかくる所あると聞べ。誠に稀有の光景とあら。讚美感心と己ハ兩
 人の女童遂に導て宮門の内に入らうらん。此所に又つの大殿あり。殿上

ふの燈燭螢煌白晝のごとく。宋江己に塔の前み至りし。数箇の女
童出迎へて云く。娘々待たておし。星主早く進み。とて
即ち宋江と延て大殿の上に至りし。宋江覺へず。戦慄毛髪倒り
堅ぬ。彼女童玉簾の内み入る。啓奏てい。宋星主今簾の前に至り
多ひぬ。宋江は是と閃く。地上み拜伏し。奏し。臣は則ち下濁の庶
民あり。聖上と識らず。伏して冀く。憐憫と垂ま。此時数箇の女童
玉の簾と高。捲くる處に。一人の娘々玉音と開ての。星主別
來恙あるや。宋江再拜して云。臣は則一箇の庶民。い。うんぞ敢て聖顔
と觀奉らんや。娘々の云く。何ぞ必しも大礼み及んや。宜しく面と奉
て對談し。宋江謹く命と奉り。乃頭と擡く。殿中と。七宝九龍
床の上に。一人の娘々坐し。多ひる。頭。九龍飛鳳の髻と結び。身。六

縷絳綃の衣と穿。藍田の玉帯長き裙と曳。白玉の圭障。粉袖と擧げ。
顔。蓮の萼のごとく。天然の眉目雲環と映。唇。櫻桃。似て。自
在の規模雪體と端。誠。凡女と見へ。彼娘々宋江對して
宜ひ。星主宜しく酒と酌。多くと。小童に命。多ひ。一人
の女童玉の盃に酒と醖。宋江に献。宋江恭。玉盃と接。これ
と飲。此酒香。馥郁。其味。甘露のごと。又一人の女童一盤の仙菓と
捧。宋江に進。彼娘々再び女童に命。又一盃を勸。多ひ。これ
宋江慎。と飲。酒己に數盃と給。娘々女童に命。宜ひ。これ
汝宜。三卷の天書と携へ。出。星主に。女。童命と奉。頓。屏
風の背後。入。則ち三卷の天書と携へ。出。宋江み。宋江拜受。これ
と袖の内。納。再。三。頓首。謝。奉。娘々の云。我己に三卷の天書と



宗江夢中
天女授
三卷
仙書



以て星主の授けし間、星主も亦天小替つて道と行ふの主とあり。忠と全
く義に仗て臣とあり。国と輔け民と安んじ。邪と去正し。歸るべし。
我まも四句の天言と星主に授へん。星主のまこと記して心不忘りてあり。れ
又世に漏れしとあり。まこと則ち四句の語と誦へて宣く。

遇宿重々喜 逢高不是凶 北幽南至睦 兩處見奇功

宋江已に閉罷り。再拜頓首してまことと記せり。娘々宜く星主は魔
心朱断を。道行未だ完くす。かろがゆ多に玉帝暫く汝と罰して下界に
下らしめ。汝宜く此三卷の書と熟覧すべし。功成るの後の必し。此
書と焚べし。必しも世に遺すべし。す。今天凡相隔りし。も多し。久く星
主と面ごし。汝速に回るべし。他日天帝に見へ奉らん。時再び玉樓金闕
上に於て。相會すべし。と則ち又兩人の青衣女童に命じ。送らしめ

あひし。宋江謹んぐ娘々と拜謝し。遂に玉殿と下つて。兩女童を
よもの石橋の辺に至り。兩女童が云。星主先ふ危急あり。時若
娘々の救ひあり。むんべ終ふ生捉まらる。娘々星主と助け。ひ
し。も多し。今已に恙あり。天明あは此難と全く脱まらるべし。必ず心
と苦しめ。まことあり。まこと又橋の下と指さる。宋江に告て云。ま
水中に二の龍有て形と現し。星主をやく。是と見え。宋江あれ
と聞て。慌て忙を欄杆に凭。橋の下と望み。見らる。果して二の竜
水面に現し。宋江自ら奇異の想とあり。處に兩人の女童後
より。宋江と水中に推落し。宋江大に駭き。阿と一声呼り。まこと。忽ち
眠り醒依然。して帳幔の外にあり。是則ち南柯の一夢あり。宋江忙し
く起て。月色とまらる。時まらる。更に近し。宋江現に袖の肉と摸らる

に果して三卷の天書あり。宋江心中に想ひろるるに此夢大ひに奇異之。
我が口中にも猶酒の香あり。娘その授けまひし四句の天言。都て心に
覚へく一字も忘ます。此廟中より必定神明の灵感ある者在て現化
し多ひるるに疑ひあし。只あらびりある神明あやと。帳幔の丹に又
の錦帳あるを高く掲ぐ。此丹と見らるる。まご夜の明ざれば眞々幽々
として見定めかゞゞぞ有る。

○ 宋江明九天玄女の遇ふ

暫時して鷄鳴鳥告く横雲と催と頃四方の間白くまはる。宋江再び
錦帳の内と伺ふ。七宝九龍床の上の一人の娘々坐し多ひるる。夢
中に拜せし娘々と。半點も差ふ所あし。宋江急におもて拜謝し。又暗
に想ひろるる。這娘々我と呼で星主と称し多ひるる。まごは是前生の

預る所ふとして我原寺閑の人ふあらし。此三卷の天書必然用る所あり
ん。又彼西人の女童我小告て。天明あは。此難と全く脱まざるべしと云
々るに我軍しく路を求めく逃行人として。則ち帳幔の外に出再び廟門
の前に至つて額と見るに。玄女之廟と云々の金字ありし。宋江忽ち
拜謝して云い。ある神明あやと思ひろるる。原是九天玄女あるよ。お
我のよと重て天日の面とるるとあは。必来つく廟と新に建立て。
聊以て今日の恩と報ひ奉らんと。觀念し。遂に村口と望く。馳出るる
處に前面に人音大に響りし。宋江又甚と驚き。路傍の木蔭小殿
を伺ひ見るに。數多の土兵忙々走り來り。各一斉に声と揚て。神
明救ひまると呼たり。其跡より。彼趙能息と限り。逃來り。我が
輩が一命脱まざる。と呼たり。宋江是と閑想ふ。彼ら

都て村口と守り専ら我と捉んとてを囚りたるに。何れも却て騒動
 せむるやと疑ひ在處に背後より一人の大漢子。奔雷のごとく吼り狂ふ
 て跑来り。奸賊何国へ逃るやと大音声に罵つて遂に趙能が頭と斧
 と以て砍劈ぬ宋江の大漢子とせむるに。乃ち是黒旋風李逵ありし
 べ。是又夢うと疑ひより。其次ふ又兩人の豪傑跳來る一人の鷓鴣。一人
 へ陶宗旺あり則ち李逵とせむるに軍器と揮つて土兵どもと四面八方
 に趕散に其跡より又三人の豪傑馳來る一人の赤髮鬼劉唐一人の石
 將軍石勇一人の催命判官李立あり都て六人の豪傑ら相聚て云々
 へ土兵ら追散せしむるも。独宋長兄の見へまぬいり人石勇が云
 木蔭にかくまある人とも恐らくへ宋長兄あらん此時宋江走り出て云
 諸の賢弟。今日又來て我と救ひまふと。其恩天地と等し。何とめつて

ようとあまを報せんや。六人の豪傑宋江を見て。大い悦び長兄恙な
 きと何の福うあまふ過人先速うに晁天王に告んとて。石勇李立飛
 びてに馳去る。宋江又劉唐に問て云賢弟ら何と以て我が此に
 在と知りまひしや。劉唐がうろく。長兄前日山を下りまひて後
 晁天王と呉軍師頻りに心と安んぜば。則ち戴院長と遣し。長兄の
 消息を求むと。いづれも晁天王猶心と安んぜば。又某らを引て親自
 半途まで打出る處に。幸ひ戴宗が回り來るに逢て。長兄の難に遇
 りし消息と聞晁天王大い怒り忙しく。此辺に至て長兄と尋し處
 に人在る告ぐるに。趙家の兩都頭若干の土兵と卒して。宋江と還道
 村に追入ぬと。詳に語りしゆ。某ら皆晁天王に隨つて還道村に斬
 て入土兵ら許多討取都頭趙得も討取猶此所まで追來り思え

長兄小見へつと。いまご云も終らざる。石勇や晁蓋、花榮、秦
 明、黃信、薛永、蔣敬、馬麟等と引て來りし。李立、六、又李俊、穆弘、張橫、
 張順、穆春、侯健、蕭讓、金大堅等と引來ぬ。晁蓋先、宋江に對して云
 我再三賢弟と諫めざるも。我が言を用ひざるも。果して禍
 小遇る。宋江が云某且暮老父が。この心小掛り坐卧安らる。尤止
 こと得ず。再び故郷に飯り。又此難に遭て多く。長兄に心勞を掛ぬ。
 晁蓋が云賢弟心と安んず。我先小戴宗、杜遷、宋万、王英、鄭天壽、童
 威、童猛ら小命じて尊父并に令弟貴族盡く棄ひ取らる。や山
 陣に送りぬ。宋江あまを聞て大ひ小悦び。則ち晁蓋を拜謝し。其恩
 と感じ。く。晁蓋諸人小下知して。還道村と馳出。遂に山陣に至りし。
 吳學究ら金沙灘に出迎へ。共に大陣の聚義廳に入。各坐定り

くる處に。晁蓋頓て宋太公並びに宋清と請て。宋江に見へし。宋
 江老父と見て大ひ小悦び。則ち再拜して云大人我がゆゑに多くの
 禍と蒙りあひて。嘸苦く。あひし。願くは不孝の罪とゆ。じ
 多。宋太公が云我向に趙能趙得に前後の門と緊く守らば。寸歩
 も家と出ること能はず。只手と束て絆め。と待居る。所に數百
 人の將率來つ。我が一家と棄ひ取直に。此所へ携へ來りぬ。汝先に我
 家の後門小來りし。時趙能兄弟汝と見著。忙しく馳て汝が後と慕
 ひくる。汝定め。緊く趕きし。あらん。宋江が云今日父子再び參會
 すること。都て晁天王あら。び小諸頭領の力あり。宋清汝宜しく諸豪
 傑と拜謝せよ。と命じ。れば宋清則諸の頭領に見へ。恭しく
 拜謝し。晁蓋ら衆人。都て宋太公に見へ。遂に牛と殺し。馬と宰て

大に飲酌と催し、宗江父子三人此より山陣に在て悦ぶと限り
 おく。一日公孫勝諸頭領に對して云く、某幸ひ晁天王に従ひ
 て山陣に上り諸英雄と斷金の交りをおく。若干月日宴と同
 りして相娛も却て故郷の事と忘まらざらん。某一人の老母蕪州にあり。
 又一人の老師も同じく彼所あり。某今日暫く諸頭領に別を故郷
 に回り。老母の安否を候ひ、再び山陣に上るべし。晁蓋云く、公孫先
 生尊母を伺ひ、某あはれあまを阻當人や。然もとも只別離に
 忍びず。今日且俱に酒宴と樂まひ。明日と下りまへと。其
 日酒と勧め別を惜まらざらん。翌日公孫勝の旅装と調へ諸英
 雄に別を山と下り、山陣の頭領共都く金沙灘の辺に送り
 又盃と勧め、陽関の曲と歌ひ、晁蓋再三叮嚀に云く、公孫勝

先生此度の歸郷我のやまを阻當べしと思ひ、老母と伺
 ひ、あまへの事あるゆゑ我あへく其志に違ふ。只望らくハ四五
 月の内再び光臨と惠まらむ。必むと約と失ひ、公孫勝云某
 重く諸頭領の愛憐と蒙り。豈あへく約と差んや。老母と老師
 ととどに伺ひ、早速歸山すべし。宋江云公孫先生ハ何ゆゑ尊母と
 山陣に迎へ、公孫勝云某が老母ハ平生只静あること、汝
 好んで開き、是に依り迎へ、某が家ハ猶幸ハ田
 地あり。故に老母ハよく水米の憂へと免れ、某只つゞ老母を見
 へ。速に歸山して再び義と全ふすべし。晁蓋一盤の金銀と公孫勝
 送て餞と表し、陽関の曲己に罷り、公孫勝遂に諸頭領に別
 送、蕪州と望んで馳行する。晁蓋、宋江、呉用、其外公孫勝と送つ

山陣に上らんとする時、黒旋風李逵忽ち声と放つて大に哭く。宋江忙しく問て云、賢弟何ゆゑ流涕するや。李逵哭く云、這へ去て父を邀へ、那へ去る母と訪ふ。唯我は是虚言なり。生じぬるや。晁蓋問て云、汝今もまこといふらん。李逵云、我實に一人の老母あり。某が兄の家貧き者。おまじむらんぞ。よく母を優に養はんや。某母と迎へて山陣に至らば、宜しく是と奉養して朝夕事んと欲す。晁蓋云、汝が欲する所、乃是孝道あり。我數箇の人と汝に従ふ。わづらわ。老母と山陣に邀へ取べ。宋江云、不可あり。李逵の原、其姓烈火のてくはし。動くすれば、事と惹出し。此度も、故郷に回らば、必然誤ちあらん。向に江州城に於て、若干の人と殺し、わづらわ官司いふらんぞ。李逵と搜さらんや。彼又相貌兇悪なり。て人皆識認者多し。若万半途に於て

疎失あはれ、誰かあへてあまこと助けんや。汝先暫く月日と延引し、世間の静謐とて待つ。此事と囚ふべし。李逵大に焦燥て云、宋長兄何ぞ斯のてくはし。公あはれ、わづらわ自家の老父に己ふ山陣に邀へ、樂まらん。我老母は只故郷に棄下て苦まらん。わづらわ願ふ事と直に治めらん。宋江云、汝妄りに我を恨る。こあまこと。汝若よく急に老母を邀へんと思ふ。我汝も三つの事を示さん。小宜しくあまこと守つて、誤さば我汝と放ち遣さん。李逵云、長兄若示し、わづらわんてあはれ、一向まこと云ふ人。我盡くあまこと守るべし。宋江云、汝今故郷に回り、老母を邀へんと欲せば、第一、わづらわ道中にあらん時、必ず酒と飲で自ら禍いと取とあつ。第二、わづらわ汝も短氣急性あつ。人に従ふ。わづらわ。只汝一人暗に往り、暗に回るべし。第三、わづらわ汝が常に使ひ慣らる。彼二の斧と

竹編水滸書傳卷之九

携るこあられ道中に於て縦ひ何らの事ありとも自ら能あまこと忍
 ぶべし。是乃ち我が汝に示す所の三度ありあつたまこと守るべきや
 李達が云此三事何ぞ難とせんや。尽く肯てあまこと守べし。即ち今
 日発足し。早く往く速に回るべきあひど長兄我が為に心と安どらん
 晁蓋宋江許若の銀と送りなれば腰刀朴刀と持諸頭領に別れ。沂
 州沂水縣と望して馳行かん。晁蓋宋江ら衆皆山陣に上り聚義
 廳に相聚り各坐己に定りし。宋江先衆人ふ對して云く。我熟
 李達が事と思ふ。這回必然誤ちを免るま。若彼と同郷の人あり
 ば早々沂水縣に馳て消息と探聴しやん。杜遷進み出く云朱貴は原
 沂州沂水縣の人あり。李達と同一郷あり。あつた彼と遣く。あまらんや
 宋江が云誠に前日白龍廟あり。衆會し。時李達と朱貴互に故郷

の好むとのべく悦ひくる。我己にあまこと忘れし。速に朱貴と呼
 で商議すべし。一人の小賊と馳くま。小賊頓て簾以下りて朱貴に
 斯と告ぐま。朱貴遂に山陣に上り。晁蓋宋江らの見へ。處に宋
 江先朱貴の對して云。此らび李達老母と邀へんが為故郷より
 うとも。彼原烈性の者あり。ゆゑ我其和すま。とと怕ま。一箇の人とも
 跟らう。彼れ。道中に於て何らの禍を受ま。も我が此所より。路
 遠くま。あまこと知り。汝へ彼と同郷あり。宜しく。勞と辞
 せ。沂水縣ふ趣き。暗に彼が消息と探聴んや。朱貴が云。某原沂水
 沂水縣の産ふ。今一人の弟朱富と云者。沂水縣の西門の外。居
 住せん。彼も又一人の兄李達と云者あり。家も貧し。某久し
 家弟が音耗とも聞らう。此度彼所へ趣ん。自ら願ふ所也。

新編 源氏物語 卷二十九

十四

宋江是と閃く。大いふ悦び。明朝発足有べしとて。朱貴と山陣に
當り。三盃と勧め。且路費とよへられ。諸の頭領に別を。遂に沂州へ進
発せり。扱黒旋風李逵へ。独自ら梁山泊と離れ。故郷へと急ぎ。一
不日。沂水縣の界に到着せり。此李逵母と擔來る道。小母と虎り
噉ま。其身へ生捕とあり。朱貴小救と。種々次巻に具あり。

